

尺度使用マニュアル

<尺度名>

状態自尊感情尺度

<測定概念>

自尊感情は、状況によって変化する「状態自尊感情」と比較的安定した「特性自尊感情」とにわけて捉えることが可能であり、前者を「現時点の自分に対して感じる全体的な評価であり、日常生活の出来事などに対応して変動するもの」と定義し、状態自尊感情尺度を開発した。

なお、本尺度は、以下の2つの条件を満たしている。第1の条件は、現時点の自己に対する全体的な評価を測定するために尺度の内的一貫性が高いことである。第2の条件は、状態自尊感情の変化があった時にその変化に対応して変動する尺度であることである。

<適用範囲>

開発の際には大学生を対象にデータを収集したことから、青年期が適用範囲である。さらに、中学生や高校生、成人にも適用できると考えられる。

<尺度構成手続き>

Rosenberg (1965) の self-esteem scale の日本語版自尊感情尺度 (山本・松井・山成, 1982) をもとに、教示文および項目文 (10 項目) を一部改変して作成した。

<信頼性>

尺度の内的一貫性について検討を行なうために、状態自尊感情尺度 10 項目に対して主成分分析を行い、負荷量の低い1項目 (いま、自分をもっと尊敬できるようになりたいと感じる) を分析から除外している。9項目への回答の信頼性係数を算出したところ、 $\alpha = .83$ と十分な高い値が得られている。なお、尺度の信頼性については、内的一貫性のみを検討して、再検査法は行っていない。状態自尊感情尺度はその時点の状況に対応して変動するといった特徴をもつことが重要であり、再検査法では信頼性を確認することができないためである。

<妥当性>

本尺度は、短期間の被受容感・被拒否感と明確な関連を示し、課題達成の成功・失敗に伴って上昇もしくは低下することが示されている。さらに、状態自尊感情尺度および特性自尊感情尺度と、特性・状態不安尺度 (STAI: 清水・今栄, 1981) との関連を検討し、状態自尊感情と状態不安、特性自尊感情と特性不安がそれぞれ有意な相関を示し、自尊感情を測定する2つの尺度の弁別性が確認されている。以上から、作成された状態自尊感情尺度が高い妥当性を備えた尺度であると判断された (各詳細については本文参照)。

<採点方法>

「あてはまる (5)」「どちらかというにあてはまる (4)」「どちらともいえない (3)」「どちらかというにあてはまらない (2)」「あてはまらない (1)」までの5件法で回答を求め、逆転項目を処理し、全項目への回答の合計を分析に使用する。

<尺度の使用について>

教示文は、測定時の感情状態について限定的に測定するために「これは、あなたが“いま”この瞬間に考えていることを測るためのものです。普段ではなく“いま”の自分が考えている

ことです。」としている。ただし、阿部・今野・松井（2008）が行っているように、研究内容に併せて教示文や項目文を変更することも可能であると考えられる。

<出典文献>

阿部美帆・今野裕之（2005）. 状態自尊感情尺度の作成の試み パーソナリティ研究 **14**, 125-126.

阿部美帆・今野裕之（2007）. 状態自尊感情尺度の開発 パーソナリティ研究 **16**, 36-46.

阿部美帆・今野裕之・松井豊（2008）. 日誌法を用いた自尊感情の変動性と心理的不適応との関連の検討 筑波大学心理学研究 **35**, 7-15.

<連絡先>

阿部美帆（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

E-mail: m-abe@human.tsukuba.ac.jp

<無料・有料の別>

無料

<著作権関連情報>

研究目的での使用の際に、著者の承諾を得る必要はありません。本尺度を用いた研究を発表する際には、適切に引用していただくようお願いします。また、本尺度を使用し、大学紀要や学会誌など論文文化を行った際には、得られた結果について一報をいただくと幸いです。